

# 『人間になりたい』

作 笠羽流雨

## ◆登場人物

A……演劇アドバイザー兼、解説者兼、博士兼、天才兼、開発者兼、人間。

B……演劇ロボット。「俺」を探している。

C……演劇ロボット。二重人格。

## ◆枚数……二〇枚(原稿用紙換算)

## ◆あらすじ

演劇アドバイザー兼、解説者兼、博士兼、天才兼のAは二体の演劇ロボットBとCの開発者でもある。抽象的で詩的な空間の中で二体の演劇ロボットは次第に自らを発見してゆく。鏡と再帰的なプログラム、そして《畏》を介して、BとCは暴走し、同時に人間存在へと限りなく漸近してゆく。肉体という畏の発見から精神という畏の発見に至るまでの人間の《誕生》を描く。

【第一場 鏡或いは実験その一】

クラシック音楽。

明転。

C、全身を縄で雁字搦めにされて座っている。

A、ノートを広げて猛烈な速度で何か計算している。

A、寒そうに身震いをして、顔を上げ、吸い込まれるようにして降る雪に魅入る。

A 落ちてくる雪を見つめていると眩暈がする

それが遥か高い空にあった頃のことを懐う

そこに過去がある……(しばらく呆然と感傷に浸る)

音楽が止まる。

A (ふと時計を見て驚き)おおお、時間だ。実験を始めよう。

C 実験？

A ああ、いま縄を解いてあげるからね。

C 縄……なわ、なわ、なわなわなわな、わな、わな、畏……。

A 畏じゃない、縄だよ。

C、縄から解放された瞬間全身の力が抜けたように崩れる。

A 躰は重いだろう。それが、「いる」ってことだよ。

C いま、ここに、私がいる。そこからこの芝居を始めたいと思う。つまり、それが私の最初の実験だ。私の躰は、この瞬間にあつて三次元的な存在だが、それは写真が見せる固執した時間の錯覚に過ぎない。

A、チェキ撮影する。

A 上出来だ……。 (出てきた写真を手に取って)うわっ、真っ白！ 今日の雪みたいに真っ白じゃないか。ねえ、時間ってのは透明な檻なんだよ。

C、写真を受け取る。

A 考えたことはないか。人間の記憶はあまりに脆い。いや脆弱なんだ。何を隠そうこいつは記憶の破壊装置だよ。人は自らに過去と未来があると思っ  
ているだろう。

C ああ、そうらしい。

A だけどそんなのは嘘さ。みんなが知ってる公然の嘘だよ。私みたいな本当の天才以外はね、誰も過去のことなんか覚えてくもないし、覚えちゃいないんだ。だって、そうだろう!! 要するに連中は、今を生きてるのさ。だからこうやって、写真を撮る。(もう一枚、今度は腕を無理に伸ばして自分を撮る)するとどうだあ。過去は記録済みということになるんだ。必要のない過去は忘却の彼方へ。便利だろう。

C 便利だ。

A そうして、過去を追われた人間は現在に閉じ込められ、未来から裁かれるんだよ。わかるだろう。さあ、私はあの場所から観ているから、覚えた通りやっごらん。

A、退場。

C 私は……私は四次元の時空連続体だ。過去の永劫から未来の永劫を一度に見渡す無時間的な存在、つまり神の視点を仮定しよう。そこに映った過去現在未来の連なり、誕生から死に至るまでの私の人生の総体は一本の折れ曲がった金太郎飴のようだ。(喋りながらゆっくりと起き上がる)

B、登場。

B あー、こんにちは。なんか、変な哲学? みたいなこと話してましたね。時空? 無時間だっけ? なんのことだか俺にはちょっと。俺は、あー俺もなんか話すんだろって見てますね。まあね、その通り、いや一応話すことがないでもないんだなこれが。ただなんちゅうか、しょうもないって言いますかね……うーん、まあ言いましょう。あのね、俺実は○○でしてね。うん。

(このセリフは半分アドリブでやる。○○には役者の身体的特徴が入る)

C いや、だってあれは。

B お前はちよつと黙つとけ。

C はい。

B でね、気になって鏡をのぞき込んだんですよ。

B、胴体を回転させ、舞台中央をのぞき込むように見つめる。

以降、CとB、完全に舞台の芯に対して鏡像対称な動きをする

無言で十秒ほど見つめ合う二人。

突如、同時に二人して転げまわって大笑い。

突如、二人して完全な真顔。

その表情のまま片手をあげ、おろす。

動的ストレッチ。

背を向けて、離れてゆき、同時に振り返り、またも大爆笑。

C、B やあ

同時に驚きの表情。

C、B なんなんだよお。

沈黙。

C、B お前の真似をするな。俺の……。

向き合って、じりじり近づいてゆく。

距離五十センチほどの場所で止まる。

C、B おまえは誰だ？

互いにピストルを取り出して相手に突きつける。

その状態でしばし停止。

C、B まるで罠だな。

それから同時に絶望的に笑う。

C、 B 冗談だろう。

二人、持っていたピストルを各々のこめかみに向ける。

C、 B 冗談だよ。

C B、銃をしまいつつ逆向きに回転し、直ちに鏡から解放された状態になる。

【第二場 消失或いは実験その二】

B あつれ〜。

C どうした。

B ないんだよ〜。

C 何が。

B 困ったなあ、もう本番始まっちゃってるよねえ。

C 始まっているよ、何がないの？

B いや、実はさ……いや、いいわ。

C なんだよ。

B 言っても信じてもらえんと思う。

C 信じるよ。

B 絶対？

C 絶対。

B 絶対？

C 絶対！

B ぜ、

C 絶対！！（相手の科白を食うように）

B 実は、さっきからさ、俺がいないんだよ。

沈黙。

C 俺がない？

B いないんだ。(いろいろな場所を出鱈目に探しながら)

C え、俺ならいるぜ、ほら、俺！

B それはお前だろう

C お前？ あ、そっか俺はお前か。

B そうだよ、俺はお前だよ。

C ん？ 俺がお前ってことはお前は俺ってことと違うか。

B は？ 俺がお前で？

C 俺はお前でお前は俺だから、俺は、お前で俺でお前で俺でお前で俺でお前で俺で……(Bがしゃべり始めてもずっと、この再帰状態に陥って抜け出せない)

B やっぱ、俺どっかに忘れてきたかもしれんわ。聞こえてる？ おーい、聞こえてる？ おーい、聞こえてる？ おーい、聞こえてる？ おーい、聞こえてる？(Bも再帰に陥る)

A、ノートPCを持ち、白衣を着て登場。

A はいはいはい。みなさん、こんにちは。演劇アドバイザー兼、解説者兼、博士です。

二人は再帰に陥ったまま。

A ストップ、ストップ、ストップ。ストップストップ！ すみませんねえ。ちょっと故障しちゃったかなあ。(PCのキーを打って)えーと、エスケープと。

C、B、瞬間的に停止。

A いや、まだこの演劇ロボットも試作段階なもんですからたまにこうやって暴走するんですよ。お見苦しいところをお見せ致しました。

C、B、同時に激しく痙攣してのたうち回り始める。

A やめなさい……。やめなさい、やめなさい、やめなさい！！ この不良品  
どもが！！ やめないか、ぶち殺すぞ！！（怒鳴り散らかす）

C、B、ますます激しく痙攣しているし、意味不明な言葉を発してい  
る。

A （客席に気づいて）ああ、失礼しました。演劇アドバイザー兼、解説者兼、  
博士兼、天才の私としたことが。疲れていたようです。えええっとこういう  
時はコントロール＋C。

C、B、突如として普通の状態に戻る。

A あ、戻った。

B こんにちは。

A ああつ、だめだよ。君らには私は見えていないんだから。私は解説者だか  
らね。

B 見えてるよ。

A 見えてない。

B 見えてるよ。

A 見えてない

C 見えてるよ。

A 見えねえつつつてんだろ！！！！

沈黙。

C え、なんか俺だけあたり強くね。（ぼそっと）

B あ、そうだ探し物があるんだった。（Cを完全に無視して）

A 演劇アドバイザー兼、解説者兼、博士兼、天才兼、開発者兼、人間として  
忠告しておくけどね、一度失くしたものはよく探さないと出てこないよ。

C 兼多いな。

B 何探してたんだっけ？

C 見つければ思い出すんじゃない？

B それもそうか。じゃあ、探してくる。

A ちょ、ちょ、ちょ。待てよ。ほんとにここをよく見た？ 演劇アドバイザー  
ー兼、解説者兼、博士兼……。

B 見たよ。

A ほんとによく嗅いだ？

クラシック音楽。

B、そこいらを嗅ぎまわる。

A、手を仰いで薬品の嗅ぎ方でいろいろな場所のにおいを嗅ぐ。

B、それに倣う。

A、Cに「お前もやれ」と手で合図する。

C、仕方なく仲間に加わる。

B ちゃんと嗅いだよ！

音楽が止まる。

A じゃあ、ほんとによく耳を澄ませた？

一瞬の沈黙。

C、B あ~~~~。

B じゃあ、聞いてみよつか？

A 二つ目の実験だ。5、4、3、、、カット……………オフ

暗転。

沈黙。

銃声。

C え、銃声？

B 本物？

C 冗談だろう

明転。

A、倒れている。

B、Cは手に銃を握りしめている。

B、駆け寄る。

B 死んでる。

C え、冗談だろう

B お前か。

C 俺じゃないよ。

B お前だろう！

C 俺じゃないって。でも、犯人は俺たちのうちどちらかってことになるよな。  
。つまり二択。

B お前だろう、銃声がしてから一番最初に口を開いたのはお前だった。怪しいよ。

C だから俺じゃないって。それに、それとこれとは関係がないぜ、頭冷やせよ。

C、何の躊躇もなく手慣れた手つきで銃を取り出しBを銃殺する。

C(別人格) これで一択だな。もう間違える心配がなくなった。

C、銃を自分のこめかみに突き当てる。

C 冗談よせよ。お前、何言ってんだ。頭おかしいぞ。

C(別人格) 君はモンテールホール問題を知らんのか？

C モンテールホール問題？

C(別人格) この手法は科学的だ。私はいつも科学的だったし、これからもそうだろう。それだけで十分なんだ。

C 狂ってる。

C(別人格) 狂ってるのは君だよ。

C 俺はまともだ。このイカレ野郎！

C(別人格) はははは。君は罠にかかっているよ。君の正体を教えてやろうか。

C 狂ってる……。狂ってる。狂ってる、狂ってる、狂ってる！！

C(別人格) 何度言うのさ。君の再帰的プログラムにはもう飽きたよ。これが  
最期の実験だ。残念だったな……私。

銃声。

C、自死する。

A、むっくり起き上がる。

A 冗談だよ。ああ、もう、これだから機械は冗談が通じなくて困る。

A、PCを少しいじる。

工場の機械音。倒れていた二人が緩慢な動作で操り人形のように起き  
上がる

Aは白い縄を二人の体に巻き付けてゆく。

Bは上を、Cは前を見つめている。

### 【第三場 詩劇・天に帰れない雪たち】

A 人生は畏だ だから

優しい世界が逃亡のチャンスを  
与えてくれた

C 世界までもが畏だった  
なんて

知らなかった

B 落ちてくる雪を見つめていると眩暈がする  
それが遥か高い空にあった頃のことを懐う

そこに過去がある

A 天に帰れない雪が落ちてくる

C 僕は思わず、ジャンプする  
過去に届こうとしてどうしようもなく

天に向かって、ジャンプする

B 涙が出そうになって、  
それを堪えようとしたら咳が出た

驚いたように口を開け

白い息を吐く

C 悴んだ指先から

B 増幅してゆく震え

C が

A 心臓に 伝わる

A、着ていた白衣を脱ぎCにはおらせる。

C それでようやく、

僕自身だって

畏なんだと気づく

暗転。

闇の中で機械音が増幅してゆき、次第に静まってゆく。

—— 終劇 ——

【初演】

東京都

北池袋 新生館シアター

二〇二三年三月二十三日